

図書館報



★ 第66号

★ 兵庫県立三木東高等学校 総務部 発行

「お仕事探究」

幼少期の絵本に始まり、小学生ではポプラ社の少年探偵団シリーズ、中学生以降は現在に至るまで主に小説を好んで読んでいました。比較的本をよく読んでいる部類に入るのでとは思っています。

兵庫県職員として働き出してから明石市にある県立図書館に勤務できる可能性があることを知り、本にかかわる仕事を経験してみたいなという思いで大学の通信教育を受講して図書館司書の資格を取ることになりました。日々の仕事の傍ら行う資格取得のための勉強は思うように進まず、ちよつと無理かなと弱気になりながらも諦めずに地道に続けてどうにか資格取得に至りました。二十年以上経過した今でも、レポート提出が単位認定試験を受ける期日に間に合わない焦っているような夢をみるころがあります。

資格取得後、配属を希望したところなかなか希望がかなわず、

かなりの年数を経過して熱意も薄れた頃、司書として働く部門ではなく総務課という部署に配置されて県立図書館に勤務することとなりました。県立図書館では4年在任し、後半は主に施設の耐震改修の仕事を担当しました。結局、司書として仕事をすると希望は叶わなかったのですが、この後に勤務した大規模な施設でも全面的な改修工事を担当することになり、県立図書館での経験は非常に役立つものであったと思います。

本の話に戻りますが、ここ数年は老眼がひどく（健康診断での視力検査ではいまだに1.5の数値が得られて遠くは見えるのですが手元が見えない・）、文字を追うことがつらくて本に接する時間がだんだんと少なくなってきました。手元視力を復活できる秘薬をどなたかご存知ないでしょうか？

最後に高校生の皆さんが気軽に手に取って読みやすい本をいくつかご紹介したいと思います。興味を持たれたら是非一度目を通してみてください。

○ボックス！ 百田尚樹

抜群の運動神経を持つやんちゃな少年と、勉強は得意だがスポーツとは縁がなかった優等生幼なじみであるふたりが高校のボクシング部を舞台にさまざまな経験を通して成長する姿を感動的に描く物語。

努力と友情、栄光と挫折、思春期の淡い思いなどが丁寧に描写され、その情景が具体的な映像として脳裏に浮かぶような王道の青春小説です。

○ジョーカーゲーム 柳広司

第2次世界大戦の直前、世界各国の思惑が複雑に絡み合う国際情勢の中、常人を遙かに凌駕する知力、体力、精神力を有し、苛烈な任務に挑む若き日本のスパイたちの活躍を描くエンターテインメント小説です。

現代とは全く異なる時代背景であるため現実感には欠けるかもしれませんが、頭脳戦、心理戦を鮮やかに制して危機を切り抜け、任務を完遂するスパイたちの活躍は単純に格好良く、自分にも何事かを成し遂げることができるとは不思議にモチベーションが上がります。

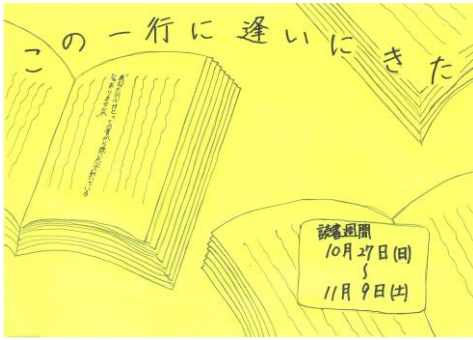
○阪急電車 有川 浩

西宮北口駅と宝塚駅を結ぶ阪急電鉄今津線を舞台にした連作短編集。

たまたま電車に乗り合わせた登場人物たちの人生が少しずつ関わりを持って展開する心温まるストーリー、心地よい読後感が秀逸の一冊です。

これを読んでこの電車に乗りたい、もっと踏み込んでこの沿線に住んでみたいという読後感想もあったそうです。

①



「本の思い出」

本との出会いは目に触れたり、自ら求めた時、人から贈られた時に始まったりするのかなと思います。最近はずっと追われることが多く、ゆっくりと腰を落ち着けて読書をする、ということができていないのが現状です。振り返ってみると、子どもの頃から現在に至るまで様々なジャンルの本と出会ってきたように思います。幼少期にたくさん読んだ本、高校時代に学級文庫で出会った本、卒業時に先生からプレゼントしてもらったハードカバーの本、大学生の頃、友人から勧められた本、教師になり始めた頃、同僚の先生からプレゼントしてもらった、当時ベストセラーとなった絵本等々。他にも洋書を含め、色々な本との出会いがありました。どの本にも自分の感情が強く揺さぶられる時には涙が溢れて止まらない、といったこともありました。

②



若いころに強く衝撃を受けたはずの感性が、年齢を重ねるごとに薄れてきているのかもしれない。このままだと失われかねない感性を何とかして取り戻さないかと。さて、次はどんな本を読もうかな。

「本の向こうに広がる世界」

私が読書をするのは、意外な出会いを求めているからかもしれません。

自分の力だけで気づくことや経験できることには限りがあります。本を読むことで、思いがけないことを知ったり、へえ！と感心して驚いたり涙したり、自分の日常の外にある世界に触れ、読書を通して著者や主人公の物語を疑似体験できることが、私にとつての「本を読む魅力」といえます。

前野ウルド浩太郎さんの著書「バッタを倒すぜアフリカで」は、私のおすすめ上位の一冊です。この本は、前野さんが「フールブル昆虫記」を読んで昆虫学者になることを夢見た小学生時代から始まります。大学生になり、海外特別研究員の奨学金を獲得して、様々な壁にぶつかりながらもアフリカのモーリタニアでサバクトビバッタの駆除に関する研究をすすめます。このバッタ（生物の教科書にも掲

載されている)は、周期的に大発生し、農業やくらしに壊滅的な被害を与えます。研究費や生活資金が不足するなか、現地の子どもたちと捕獲協力体制をつくり、かろうじて研究を継続させた時期もあります。長期にわたる研究の成果が認められ、モリタニアで最高の敬意を払う「ウルド」の称号を授けられました。

私がこの本を読んだきっかけは、前野さんが全身緑色のタイツを着て研究資金を募っている強烈な姿を見たことです。変な人が出版している本を何の期待もせずに読み始めました。山のように苦労があっても、興味があることを突き詰めていくと手が届くことがある。そして、いろいろな人と出会い、研究の挫折が続くなか結果が出なくても見てくれている人がいて、巡りめぐってその人たちに支えられることになる。

私の毎日は平凡です。国際的な評価をされるようなことは何一つなく、劇的な出来事も起こりません。そんななかで、読書を通して前野さんの経験を知り、

夢に向かつて戦い続ける生き方に触れたこと、日々の努力や周りの人への感謝に意味があることを私の小さな世界に教えてくれる気がしたのです。

自分の経験では実感できないことであっても、「きつと大丈夫だぞ!」と根拠のない自信を持つて、そんな気持ちに本の世界がつけなくてくれるのです。

「読書は大切」

読書は大切だとよく言われますが、自分自身あまり本を読んだ記憶がありません(漫画はたくさん読んでいます)。小説にチャレンジしたものの、途中で睡眠に襲われ断念することが多かったです。もっと小さい時から読んでおけばよかったと後悔しています。

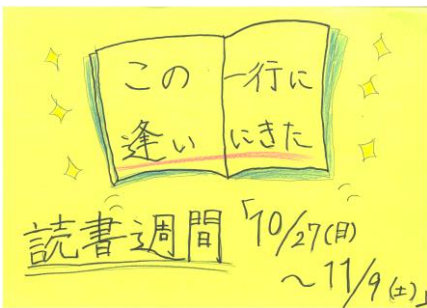
しかし、子どもが生まれてからは本と関わるが増えました。絵本の読み聞かせをしたり、

図書館に本を借りに行ったりすることもありません。保育士の人みたくにうまくはできませんが、子どもを飽きさせないように工夫しながら読むようにしています。

最近では、長男の宿題で音読を聞くことが日課になっていきます。「大きなかぶ」「くじらぐも」「スイミー」など自分が小学生の時に勉強した話が出てきて、すごく懐かしくなりました。

子どもには本をたくさん読んでもほしいのですが、無理やり読みなさいと言っても読まないと思うので、本を身近に感じられるような努力をしていきたいと思っています。

③



「本(電子書籍)を買う理由」

今の時代、紙の本の代わりになる読みものは沢山ある。紙の本であることにこだわりがなければ、電子書籍でも構わないし、Webメディアにも代わりになるものはある。インターネットの普及によって手段は多様化し、Web広告の台頭によってか無料で入手できる情報が随分と増えた。

工夫をすれば、無料のWebコンテンツだけで調べものなどの目的を達成することもできる。特に動画は便利だ。読まなくても勝手に情報が入ってくるし、欲しい部分だけ要約されていて、時間や労力の節約になって効率が良いと思うこともある。

このようなことがいえる時代になったが、代金を支払って紙の本や電子書籍を購入することがある。

小学生の頃は、日常的にインターネットを使える環境がなかった。「知りたい」「調べたい」と思ったときには、書店や図書館に足を運んで、本を開いては閉じてを

繰り返していた。その当時は、それが一番効率の良い手段であったし、本から学んだことも沢山あった。また、本を探して選ぶことを楽しいと思っていた。

後にそれがネットサーフィンに置き換わり、本は要らなくなったのかというと、そうはならなかった。

その一番の理由は、本にしか書かれていない情報があるからだ。「本漁り」の懐かしさから、本を手に取りたくなることもあるが、何よりも情報の質を求めるとき、本に行き着くことが多い。

資料として本を使いたいとき、電子書籍の方が便利なのもあるが、ものによっては紙の本しか存在しない。そういうときは、昔と同じように書店や図書館に本を漁りに行く。

「学生の頃の本の思い出」

中学と高校の頃、本を読むのが好きでした。ファンタジー小説やミステリー小説、恋愛小説はよく読んでいました。特に「よるのげけもの」という本が好きで、何度も読みなおしていた記憶があります。読み返す度により深く理解ができる作品で、とても読み応えのあり、またよく考えさせてくれる本でした。この本を読むことを楽しみにして一日を過ごすということもありました。興味があれば、ぜひ読んでみてください。

高校は通学が電車だったため、電車の中で本を読むことが多かったです。本を読んでいると本に集中できて、時間がたつのはやく感じ、電車に乗っている時間があつという間でした。友達とこの本が、あの本がという感想を語り合うことがとても楽しかったです。本について友達と話すことでよりその本について理解できたように感じています。自分だけで楽しめるとい

うことも本の良いところであると思います。しかし友達とその本について感想を言い合うということも、これもまた面白いです。学生時代この楽しさに虜になっていました。

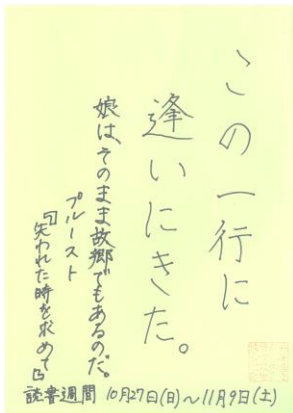
本は自分自身の知識やボキャブラリーを増やしてくれます。中高生にとつて難しい言葉を使っていたりする本もありましたが、そういった本を読むことで、自分の蓄えになっていったような気がします。特に中高生の時は様々なことを学ぶことでより成長できる時期です。本を読むことで自分磨きにもなりますので本を読むことを習慣にしてみてください。新たな発見ができると思います。

④

「本を読む時間」

私は本を読むのに結構時間がかかる方で、あまりたくさんの本は読んできませんでした。それでも今までは、自分が楽しむために小説などの本を手取ることもあれば、大学生のころには勉強のために専門書を図書館で探して読むこともありました。働くようになってからは、読むのに時間のかかる専門書は読まなくなり、実生活に直結するようなものや、仕事に使えるような実用書を読むようになりました。けれどそれもわかりやすくまとめられていて、比較的短時間で読めるのでじっくりと時間をかけて読む機会は減ってきたように思います。

専門書のような難しい本は読むのに時間がかかるけれど、勉強にはなるので時間に余裕があれば読んでもいいかもしれせん。けれど、難しく読んでわからなかったり、読む時間がなかつたりするのなら、好きな本でもすぐ読めそうな易しい本で



もいいと思います。

私は何となく苦手だったのもあって、片付けの本を手にとったことがあります。読みやすい本だったのですぐに読めたし、実践しやすい内容だったのでやってみました。一年以上使っていないものは、この先もずっと使わないので思い切って捨てる、何かを買ったら何かを捨てるというのを今でも習慣にしています。皆さんも自分にあつた本を手に取り、少しずつでもいいので読むことで読書を楽しんだり、知識を深めていったりしてください。

⑤



「自分だけの特別」

みなさんにとって「特別な本」はありますか？私は年を追うごとに本を読む頻度が落ちてしまっていると思っていました。よく考えてみるとそんなことはなく、大学で教科書として使われていたものが本だったことに気づきました。本は思っていたよりも私にとって身近な存在だったのです。そして、私は自分にとっての「特別な本」をたくさんもっています。

小さいころはよく図書館や図書室で本を借りていました。特によく読んでいたのは絵本、小説、伝記漫画です。大学では英語の小説や絵本を何冊か読みました。その中でもおもしろかったのは「Twelve Angry Men」という小説と、「Gonilla」という絵本です。日本語版もあるのですが興味があったら読んでみてくださいね。児童文学についての授業では、それぞれの絵本に施されている工夫や絵本の読み方、絵本を読むことにはどのような

意味があるのかを学ぶことができたので、本を読むことがより一層おもしろくなりました。本って、私たちが知っているよりもっともつと種類があつて、知れば知るほどおもしろくて、とっても奥が深いんです。あなたにとって「特別な本」であり、しばらく読んでいないものがあれば、読み直してみると新たな発見があるかもしれませんね。

小中学生のころ、周りの人は「夏休みの宿題の中で読書感想文が一番嫌やわ」なんて言っていました。みなさんはどうでしょうか。私は、ワークや毎日の一言日記に取り組む時間は苦痛でしたが、読書感想文を書く時間は少し楽しい時間でした。それはきっと私が読んでいておもしろい本を選び、その本からたくさんのおもしろいことを感じ、学びを得ることができていたからだだと思います。現にその本は今でも私にとって特別です。

私は今回、テーマを「自分だけの特別」にしていますが、それは一体どのようなものなのでしょう。その正解はあなただけのものです。その本を読むことで

笑顔になれた、涙が流れた、世界が広がった、知識が増えた、なんでもいいんです。本を読むことであなたの何かが増え、豊かになったなら、それはごく素敵で特別な出会いだということ。観たことのある映画の原作本、表紙に惹かれた本、少しでも気になった本があれば手に取ってみてください。それが「自分だけの特別」との出会いになるかもしれません。

⑥

この一行に逢いにきた

読書週間 10月27日(日) ~ 11月9日(土)

「知識は金なり」

みなさんは、本を読みますか。私は本を読むのが好きではありません。高校生までは、部活動で忙しくあまり読む時間がありませんでした。

私が大学生になっても本を読む機会はないと思っていました。しかし、本を読むきっかけが生まれました。私は起業や投資をしたいと思い始めました。そこで、1日1冊を目標にビジネスに関する本や新聞を読み始めました。

本を読み始めて2年が経ち、会社を小規模ですが起業することができました。その後、沢山の人と出会いました。今までは、アドバイスを聞く側でしたが、いつのまにかアドバイスを与える側に変わりました。本を読まなければ今の自分ではなかったと思います。

そこで、おすすめしたいのは日経新聞です。みなさんは、日本や海外のニュースをどこまで知っていますか。テレビでさえ

見てない人は多いと思います。日経新聞では、今の日本の経済を知ることができます。日経新聞は今でも欠かさずに読んでいます。

誰もが簡単にお金を稼ぎたいと思っただけで、それは、ほとんど不可能に近い。そのため、本や新聞を毎日少しずつ読めば将来に必ず役に立ちます。本や新聞は、自分への未来の投資だと思っただけで頑張ってみてください。

⑦



「読書の冒険」

図書館は、私に未知の世界に触れる機会を与えてくれ、本の楽しさを教えてくれました。ページをめくることで広がる物語に夢中になることもあり、その時間は普段の生活では味わえない特別な楽しみでした。

印象に残っているのは、図書館の静けさとその独特の雰囲気です。書架の間に漂う静寂と、ページをめくる音だけが響く空間は、心を落ち着け、集中力を高めてくれました。周囲の静けさが、読書に深く没頭するための理想的な背景を作り出し、どんなに忙しい日常でも心の安らぎを与えてくれました。また、図書館では、特別なイベントや著者の講演、子ども向けの読み聞かせなど、多くの文化的な活動にも触れることができました。これらの経験は、図書館を単なる本を借りる場所以上のものにしてくれました。その静けさと無限の可能性を持つ空間は、今後も私の人生において重要な役

割を果たしてくれると信じています。

好きな本として挙げたいのが、王道ではありますが、ハリポッターシリーズです。物語を読み進める中で、私は彼らの冒険に夢中になりました。また、本の内容について考えたり、次にどんな冒険が待っているのか予想したりする時間は、とても楽しく、貴重なものでした。シリーズの各巻を読み切るたびに、新しい巻を手にし、読み進めるのが待ち遠しかったのを覚えています。

この彼らの冒険を通じて、物語の面白さだけでなく、多くのことが学べました。家族や友達の大切さ、困難へ立ち向かう苦労、そして自己成長の価値など、多くの重要な教訓を得ることができました。この体験は、単なる読書を超えて、私の成長にとっても貴重なものとなりました。

「本と音楽とシンジヤーエール」

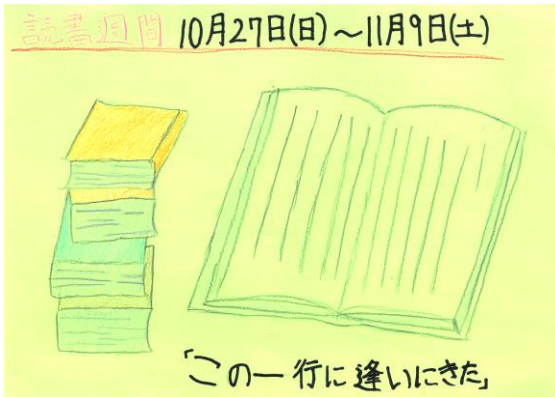
とある場所に、図書館でもないカフェでもない空間がある。私が勝手ながらそこに名前を付けるとすれば、「図書喫茶」とするだろう。

図書喫茶は、毎日開けているわけではない、曜日と時間を限定している。公に宣伝して⑦場所でもない、いつ行っても、私だけの貸し切り空間である。そこで私は、辛口シンジヤーエールを片手に、置いてある本や時には漫画を読んだり、勉強をしたりしている。流れる耳馴染みのいい音は、邪魔することなく、後押ししてくれているよう。通ううちに、店員さんの「ありがとう、ごゆるりと」の優しい言葉がけが嬉しく、ついついケーキも頼んでしまう。昼下がりの光が差し込む中で食べるときも、暗くなって電気を点ける下で食べるときも、より一層おいしいと感じてしまうほどに、私にとってここは、特別な空間となった。

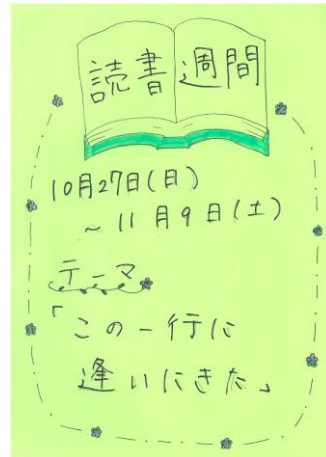


⑧

自分が手にする本は、だいたい決まっており、「伊坂幸太郎」「有川浩」が自分の部屋に並ぶ。伊坂さんの本は、陸上で世界三位を取った友だちがしつこいぐらゐ勧めてくれたもので、(まあ世界が推すなら)と手に取った。ら、まんまとはまってしまった。有川さんは、兵庫が舞台となる「阪急電車」をきっかけに手に取ったら、これもはまってしまった。 つくづく周りの影響を受けやすい性格だなあと感じる。ただ、このおかげ故に、図書喫茶で新しい本と出会い、はまる本を見つけたら、特別な空間を大切なひとたちに教えたい。



⑩



⑨



⑫



⑪

- ① 3の1
- ② 3の2
- ③ 3の2
- ④ 3の3
- ⑤ 2の3
- ⑥ 3の3
- ⑦ 3の4
- ⑧ 3の4
- ⑨ 3の5
- ⑩ 1の4
- ⑪ 1の5
- ⑫ 1の5
- ⑬ 2の5
- ⑭ 2の1
- ⑮ 1の2
- ⑯ 2の5



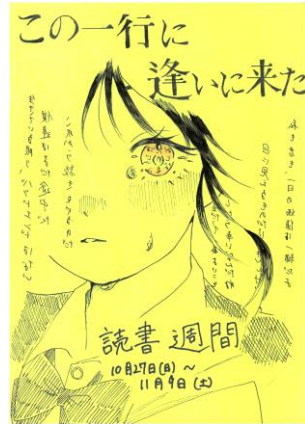
⑭



⑬



⑯



⑮

編集後記

この図書館報は、昭和五十五(一九八〇)年六月一日に創刊し、今年で四十五年目を迎えました。

毎年、新着任の先生方に原稿をお願いし、図書館報をつくっています。今年度は十一名の先生方に執筆していただきました。今年度も先生方のご協力のおかげで無事に図書館報を発行することができました。興味深い内容ばかりですので一読いただきたいと思います。それでは、新着任の先生方の寄稿をお楽しみください。

一学期は勉強をする場、読書の場として活用していただきました。「また行きたいと思える図書館」を目標に、引き続き図書委員と活動を続けていきます。毎月発行のLibraryも「楽しみにしています」というお声をいただきます。ありがとうございます。最後に、ご多忙な中、原稿執筆していただいた先生方、本当にありがとうございました。心より感謝申し上げます。